



カトリック町田教会
町田市中町 3-2-1
電話 042-722-4504
FAX 042-722-4512

いかにずちの子

http://www.machida-catholic.jp/



「全能永遠の神よ、あなたは、御ひとり子の母、汚れのないおとめマリアを、からだも、魂も、ともに天の栄光に上げられました。信じる民がいつも天の国を求め、聖母とともに永遠の喜びに入ることができますように」

カトリック中央協議会

一枚の葉っぱ

主任司祭 小池 亮太

雨の日には、木の葉の雨粒が緑色に染まり、晴れた日には風に揺れる葉が銀色に輝き、木々の美しさが眩しい季節になりました。

そのような木に近づいてよく見ると、木の葉が重なることなく、しかし、隙間なく、きちんと計算されたかのように美しく枝に並んでいることに気がつきません。それは「光合成をするための日光を効率よく受けるためだ」と説明さ

すれば、「なぜなのか」は納得がいくし、それは当然のことのように思えます。でも、「どうしてそうなるのか」はよく分かりません。どうして、適当な距離を保てるのでしょうか？誰が、どこの部分ですべての葉の大きさや位置などを調整しているのでしょうか？そのようなことを考えながらよく見ていると、同じように見えて、全く同じ葉は一つとしてないことに気がつきま

す。形や大きさに微妙な違いがあり、穴があるもの、端が切り取られているものもあり、個性豊かな一枚一枚の葉が一つの枝に並んでいます。

そして、個性的な葉一枚一枚は、光合成によってブドウ糖やデンプンを作り、木全体を成長させます。樹齢千年を数え、幹の周りが十数メートルにもなる巨木も、小さな葉が栄養を作ること成長してきたのです。

その、それぞれ違う一枚の葉は、自分が出てきた木がどこに生えていて、どのくらいの高さ、太さがあるのか、自分がどのあたりの枝の、先から何番目にあるのかを知ることはできません。なぜなら、一枚の葉には木全体を捉えることができないからです。だからといって、葉には何の都合もありません。葉は自分に与えられた場所で、雨に打たれ、風に吹かれ、そして、太陽の光を浴びて栄養をつくり、自分のつながっている木を成長させてゆきます。そして、時が来て役割を終えれば、枝を離れ木の根元に積もってゆきます。

このように考えると、一枚の葉っぱと人の一生はとても似ていることに気がつきます。私たちは、自分がいつ、どこに生まれるかを選んだわけで

はありません。気がついたら「私」は世界と歴史のこの位置に存在していたし、「私」という存在の不思議、「私」と世界の関係を上手く理解することもできません。しかし、与えられた「私」の命をきちんと使えば、全体を捉えることなど決してできない世界と歴史を豊かに成長させてゆくのは確かです。

さらに、一枚の葉について言えることは、一本の木にも言えます。森の中の一本の木は、森のどこに位置しているのかわかりません。その森も、世界の一部でありながら、その位置を知りません。まるで、世界は入れ籠のようなのです。

このように、小さな一枚の葉の在り方から、「私」と世界や歴史についての関係を読み取ることが出来ます。しか

春の巡礼

運営委員 鈴野 将



昨年の大震災以来、キリスト者としてどう生きていくべきか、原点に戻るために巡礼を計画していたところ、この春、親しい方たちと大阪、京

し、神が決めた「私」の位置と役割を知るために、葉だけではなく木を、木だけではなく森を、そして様々な要素によって構成されている世界と歴史を捉えようとする必要も必要です。

近くを見ながら、遠くを見る。この世界にあつて、「私」に与えられた命をその時、その場所、誠実に生きることの大切さ。同時に、長さや広さと深さを持った大きなうねりのような神の救いの歴史の中で、「私」が役割を与えられて生きていることの不思議。そして、「私」という存在を捉えることの難しさ……

黙想会のために滞在した軽井沢の、少し湿り気を含んだ涼しい風に吹かれながら、その様なことを考えていたのです。

都方面の巡礼が実現した。

まず最初に、三年ほど前にイタリア巡礼の時お世話になった神父様がおられる西宮の仁川教会に行き、メンバーのご主人の追悼ミサを挙げていただいた。続いて大阪に入り、玉造のカテドラルで細川ガラシャ夫人の事を思い巡らせた。次に高槻教会高山右近記念聖堂を訪問し、列福を願って

ト（9時以降10時半までは自由参加）。ここでは恒例となっている参加者全員の3分間スピーチを始め、心行くまでの自由討論。少々アルコールも入り、全員饒舌とどまるところを知らず、実に楽しいひとときとなりました。

2日目、第4部、自己黙想。全員7時起床。7時半よりごミサ、朝食と続き、以後解散の11時半までは各自聖堂、談話室を利用しての自己黙想。以上のような要領で、今年

東北 大震災 支援 報告

① 神さまの平和の道具として

昨年の東北大震災直後の13日から支援の衣類を募った。

「ごぶたのしっぽ」もなにかお役に立てることは……。

最初はどこに何をすればいいのか見当がつかない。大震災の支援物資がどのルートで届けられるのかも分からない。テレビやラジオのニュースを聞きながら、相模原市や町田市役所に何度も電話をいれて尋ねた。やっと、相模原市が大船渡市と姉妹都市になって

いるとのニュースが入り、第一回の支援物資、少しの食料品やベビー用品、ティッシュなどを購入し、相模原市役所に鈴野さんと白井さんが車で届けてくださった。

一番最初に呼びかけた衣類

もヨゼフ会黙想会（静修会）は終了。実に充実した実り豊かな会となりました。関係いただいた方々、特に汚れなき修道会のシスター方のご協力には、毎々のことながら深く感謝しております。また、世話役をお引き受けいただいた諸氏（赤瀬、坂井、田沢、滝口の各氏）ご苦労さまでした。

なお、来年は5月25日（土）26日（日）が予定されており、メモのほどよろしくお願いたします。

ごぶたのしっぽの会 元 信子



が、なんと（！）小型トラック一台分ほど集まった。高木神父様が驚いて、衣類をストップするようにと電話が入った。私も驚いた。この大量の衣類も、信徒の皆様の手で早く片づけて、被災地に送ることができました。

10月あたりまでは、キャンパス（全国ナースの会）を通じて、気仙沼、いわき市、石巻、福島、東京都など、物資は食料品、衣類、浴衣、やかん、長靴、スポーツドリンク、殺虫剤、観葉植物など、これまでに90個以上の物資を送ることができました。

昨年の10月からは、福島の野菜販売の支援なども続けることができるようになりまし

た。この活動を支えてくださったのは信徒の皆様からの支援金、そして沢山の物資の提供とご協力でした。これなしに続けることはできません。また、この活動を支え、惜しみなくパッケージの提供をしてくださった鈴野与志子さんには、心から感謝申し上げます。さらに、陰ながらいろいろアドバイスやご支援をくださった高木、小池両神父様にも感謝致します。そして町田教会の信徒の皆様温かいご支援に心から感謝致します。

これからも「しっぽ」一役、皆様のお力を支えに、神さまの平和の道具の一つとして続けることができます。

② 宮古市での生活支援

JOCs 原 久子

2012年4月23日～30日に岩手県宮古市赤前仮設住宅、板屋仮設住宅、藤畑仮設住宅の生活支援活動を中心とした「岩手県被災地支援活動」に参加しました。活動母体は、阪神大震災後、仮設住宅支援活動にJOCsワーカーとして携わった保健師の大川記代子さんが主宰するNPO法人「おおぞら会」です。この会の支援活動は、2011年7月に始まり、その後、隔月に

けていくことができれば嬉しいです。

ワンポイント聖書

十戒・その八

あなたは盗んではならない。

（申命記5章19）



(187)

前島 誠

さて申命記は、次の6章4以下に、自分はどういうかたなのかを明言なさい。ここに引用しましょう。

この掟、原文では、
「**アサシム**」ろー「決して……するな」
「**アサシム**」ティグノヴ「お前は盗みを」と、
二語で簡潔に表現されています。
「殺すな」「姦淫するな」に並んで、「盗むな」と続く。この三つが当時、礼明をする際の三つの柱として、各人が自分への戒めとしたものでした。

ティグノブ（盗み）の対象は、主として具体物——「人」や「物」を盗む場合に使用されるとご理解ください。

「聞け、（シ、エ、マ、ア）、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい……これをするとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、あなたの家の戸口の柱にも、門にも書き記しなさい」（6章4～9）

イスラエルを旅して、家の戸口の柱に手を触れたこと——懐かしく想い出される今日この頃です。



初聖体

6月10日



支援をしています。活動の内容は生活支援につながる、学習指導・健康支援・傾聴活動・お茶会を通しての助け合い援助等、全般の支援です。

朝9時に宿泊所を出発。午前中は、仮設住宅を2人1組で個別訪問。健康状態のチェックやお薬相談等。その後、集会所に戻り、ミニバザー・お茶・手芸コーナーなどの用意。13時からのミニバザーは「ラジオ体操」で始まり、隔月はずっと続いているこの集まりを、仮設の皆さんは楽しみにしておられ、「大阪から又来てくれたのね!」待っていたよ。今回のメンバーには「皆、関東の人なんだ!ご苦労さま」と接して下さり、私達の方が逆に励まされました。私達以上に豊かな自然に囲まれた暮らしをされていた方達が、あの3月11日を境とし、一瞬のうちに全てを失いゼロ



の状態になったのです。そこから立ちあがっていく大変さを話の端々から知ると、「ボランティア」という名の下に、大きな顔をして宮古に来た事を恥ずかしく思いました。現地の人々はこのような私達をも温かく迎え入れて下さいます。

震災直後、JOC Sから緊急医療チームの一員として釜石に入って見た大槌や山田町の惨状を思うと、1年を経過し日々の生活が戻りつつある現場を見て、「人の力って本当にすごい!」と胸が熱くなるものがありました。力を出し、立ち上がりつつある人々の邪魔をせず、支えていきたい。今後とも自分の置かれた場所で被災地を忘れず支えていきたいと強く思いました。



【上】日曜日ミサ後の福島の野菜販売。
【右】宮古市の仮設住宅でお花見の準備をしているところ。

犠牲献金

中高生会	
5月6日	22,907円 (ペロニカ苑へ)
6月3日	23,087円 (ペロニカ苑へ)
7月1日	23,451円 (ペロニカ苑へ)

☆例年の終戦日特集に代わり、今年には東北大地震関連の特集を組みました。

☆291号に誤記がありました。お詫びして訂正いたします。

2頁「外国人のための黙想会」
高木父様↓高木神父様
2頁「運営委員会」組織図
典礼委員長 伊東宏↓伊藤宏

「雷の子」次号編集会議予定
9月2日(日)09時30分
於会議室

信者動静 2012年4月～7月

(個人情報のため、削除しています)